

令和7年度 自己評価書

学校園名 附属国際中等教育学校

1. 学校経営計画

別紙のとおり

2. 自己評価

領域	重点目標・具体的取組	達成状況・成果と課題	今後の改善方策	学校関係者評価を踏まえた今後の改善方策												
学校運営	<ol style="list-style-type: none"> 1. IBO プログラム評価認定継続 2. 働き方改革 5項目以上 3. 校内防犯カメラ設置 追加設置 4. 学びの確認アンケート 年2回実施 5. AI 利活用と学問的誠実性についての校内規定整備 	<table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 40%;"></td> <td style="width: 20%; text-align: center;">7項目</td> <td style="width: 40%; text-align: right;">達成</td> </tr> <tr> <td></td> <td style="text-align: center;">1か所追加</td> <td style="text-align: right;">達成</td> </tr> <tr> <td></td> <td style="text-align: center;">2回</td> <td style="text-align: right;">達成</td> </tr> <tr> <td></td> <td style="text-align: center;">整備済</td> <td style="text-align: right;">達成</td> </tr> </table>		7項目	達成		1か所追加	達成		2回	達成		整備済	達成	<p>【IB委員会】 IB教育モデル校を目指す学校経営計画の重点目標達成のために</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ IBと他分掌との協働は引き続き必要である。例えば国際教養委員会や研究部などと連携し、それぞれの理念を統合した学校づくりが急務である。2026年度はPDPの実施を軌道に乗せることが望ましい。 ・ DP最終試験のデジタル化に向けた準備が必要 ・ TOKの授業担当者をスムーズに決定するために、国際AやPP、理探・総探との関係性をもう少し明確にし、見通しが持ちやすいプロセスを構築する。 <p>【SSH委員会】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 4年後半の探究の充実（データサイエンス講座など）や5・6年の探究の統合など新たな 	<p>保護者アンケートで好意的でない結果となっている項目があることも踏まえ、学校側の対策や相談窓口等についての周知を充実させる。</p> <p>学びの確認アンケートをはじめとした生徒・保護者からの声を次年度の目標設定に適切に反映させる。</p> <p>施設の外部への貸出による使用料の徴収など、独自収入の捻出も検討する。また同窓会組織</p>
		7項目	達成													
	1か所追加	達成														
	2回	達成														
	整備済	達成														
<p>① IB・SSH・ユネスコスクールとして特色ある教育に取り組み、企画立案・実践・評価・改善を行う。社会に開かれた教育課程を実現する。他IB校やインター校など国内外の学校との連携を深め、教育力の充実を図る。</p> <p>② 「附属校として全国における先導的な教育モデルとしての役割を果たす」とする大学方針に沿って、現職教員の研修の場として本校の授業研究や実践の成果を役立たせる。</p>	<p>【IB委員会】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 評価訪問のため、8月のIB研修会において、すべての教員がプログラムの規準と実践要綱を確認する時期を設けた。また、評価訪問ではおおむねすべての教員が面談に参加し、IBへの理解と危機感を深めた。 ・ TOK展示を5年一般Pの生徒にも公開し、ディスカッションする機会を設けた。IB研修会で筑波茗溪学園のTOK担当者に来てもらいTOKについての研修を設定した。 ・ 「IBプログラム実施上の諸課題を改善する」「学校全体で授業時間の確保充実」DP授業時間数確保のため、5年4月編入生のDP受入を廃止した。2026年度DP5年生から春休み授業を実施できるよう校内整備を進めた。 ・ 「教科指導においては生徒の学習・生活実態を踏まえ、課題の内容、実施期間について負担過多にならないよう調整し、…」MYP総括的評価課題について、カレンダー作成の実現可能性について校内で検討した。2月の校内研で今年度の課題状況を整理し、教員間で現状を把握することで落ち着いた。 ・ 放課後の教科としての日本語指導（JSL）及び当該生徒の学校生活への適応を目指し生活指導や補習を行った。学習支援指導員とともに各教科・担任が連携して生徒の指導にあたった。「母語伸長プログラム」（FLS）を5言語程度で実施 															

		<p>した。</p> <ul style="list-style-type: none"> 各教科内にとどまらず教科横断的に教員の授業力を向上させるための研修の充実を図る。研究機関や企業などの外部リソースを取り込み授業改善に生かす。IB研修会でTOKについて取り上げ、MYP・DP担当教員以外への浸透を目指した。 学問的誠実性ポリシーの大幅改訂を行ったことも大きな成果である。このポリシーを改訂するにあたって、AIの使用について教員間で協議する機会を設け一定の共通理解と危機意識を共有することができた。 <p>【SSH委員会】</p> <ul style="list-style-type: none"> 研究グループ制度によって教科の枠に閉じない概念的理解の形成を目指した授業開発を行い、授業研究会で授業公開した。 SS科目については引き続き開発・普及を行った。 国際教養における6年間の体系化した学びと課題研究の活性化を行った。1年生富士ワークキャンプにおける学びの森の実践を深めた。4年探究では理数科や4年探究グループを中心として、データサイエンス講座の開発を行った。 本校HP・研究開発報告書・生徒論文集などで成果を対外的に公表した。 授業研究会でSS科目等の授業公開を行い、SSH情報交換会を実施した。 学校設定科目「ISS課題探究」の開設に向けた検討を行い、令和8年度からの実施に備えた。 関東近県SSH指定校合同研究発表会@工学院大学を幹事校として開催した。 <p>【交流委員会】</p> <ul style="list-style-type: none"> 国内交流では高知県立高知国際中学校・高等学校との交流事業【Glocal café】第5期東京Campを実施した。 海外交流では台湾スタディツアーで国立臺灣師範大學附属高級中學との研究交流を実施した。 <p>【国際教養委員会】</p> <ul style="list-style-type: none"> ユネスコスクールの更新手続きを行うにあたって本校の実践の一部を外部に示した。 全生徒・全教員が登録される「国際教養」Teamsの運営は2年目に入った。SA活動の周知や生徒の活動の支援を実施、情報の一元化も可能となった。 <p>【研究部】</p> <ul style="list-style-type: none"> 校内研究会等でIBの評価訪問に向けてのPDPを実施し、評価訪問には全教員で 	<p>な取り組みを推進するためには、課題研究の時間数の増加や事業内容の充実が必要である。</p> <ul style="list-style-type: none"> 国際教養委員会との連携も深めて中間評価や第4期申請に向かう必要がある。 <p>【国際教養】</p> <ul style="list-style-type: none"> 「国際教養」を時代に合わせ更新する必要がある。 ユネスコスクールの認可基準の変更に対応する。国際デーに関連するイベントを年2回実施する。 海外ワークキャンプの日程を調整し、教員の勤務時間とのバランスを図る <p>【研究部】</p> <ul style="list-style-type: none"> IBからのフィードバック・課題も多くあり、今後5年間のさらなるIB教育実践開発の充実が重要である。 <p>【教務部】</p> <ul style="list-style-type: none"> 留学規定の見直しが必要 	<p>OB、OG、PTA組織の協力の拡大も検討する。</p> <p>ユネスコスクールとしての自覚をもちその価値を生かす。</p>
--	--	--	--	--

		<p>対応した。</p> <ul style="list-style-type: none"> SSHの仮説1「教科の枠に閉じない概念的理解を志向した授業や文理融合型の授業による学習の転移を促す授業開発」に対応した校内研究課題を設定して全校体制でSSH事業の推進と研究開発を進めた。 <p>【働き方・管理職】</p> <ul style="list-style-type: none"> 部活動指導員の業者委託を検討し令和8年度より実施 日直の人数削減及び日直による戸締り業務の廃止（退勤時間の徹底） 教務支援システムBLENDの導入それに伴う内規の変更（教務部） 授業時数特例校の申請 内部連絡進学の出願のオンライン化（入学選抜） 																	
教育活動	<table border="1"> <tr> <td>6. 教務支援システムの有効利用 各6分掌での活用</td> <td>5分掌</td> <td>未達</td> </tr> <tr> <td>7. 教育課程のスリム化・改善 5か所以上</td> <td>7件</td> <td>達成</td> </tr> <tr> <td>8. 評定に関するミス ゼロ</td> <td>複数</td> <td>未達</td> </tr> <tr> <td>9. 調査書記載ミス事故 ゼロ</td> <td>0件</td> <td>達成</td> </tr> <tr> <td>10. いじめ重大事態・貴重品盗難 ダブルゼロ</td> <td>いじめ重大事態1件</td> <td>未達</td> </tr> </table>	6. 教務支援システムの有効利用 各6分掌での活用	5分掌	未達	7. 教育課程のスリム化・改善 5か所以上	7件	達成	8. 評定に関するミス ゼロ	複数	未達	9. 調査書記載ミス事故 ゼロ	0件	達成	10. いじめ重大事態・貴重品盗難 ダブルゼロ	いじめ重大事態1件	未達		<p>【SSH委員会】</p> <ul style="list-style-type: none"> 総合的な探究の時間として実施する「ISS課題探究」の開発と実践をすすめる。 <p>【研究部】</p> <ul style="list-style-type: none"> Webを通じて利用可能なアプリケーションや、AIを利用したサービスを利用できるような制度的・財政的な整備が必要である。 <p>【国際教養】</p> <ul style="list-style-type: none"> 生成AIを活用して、教員の業務効率化と、生徒への指導の深化をうまく両立させる必要がある。 <p>【教務部】</p> <ul style="list-style-type: none"> 教育課程の適正化および留学規定の見直しが必要 	<p>進化速度が著しく速い生成AIに対応するため、AIの利活用についての校内規定については、頻繁に見直す機会を設ける。</p> <p>いじめ発覚後の対応を重視する。</p> <p>部活動の部費負担を保護者から理解を得るために、時間をかけつつも、滞りなく部活動が実施する。</p> <p>教育課程のスリム化にともなう生徒への負の影響が生じないようにする。</p>
	6. 教務支援システムの有効利用 各6分掌での活用	5分掌	未達																
7. 教育課程のスリム化・改善 5か所以上	7件	達成																	
8. 評定に関するミス ゼロ	複数	未達																	
9. 調査書記載ミス事故 ゼロ	0件	達成																	
10. いじめ重大事態・貴重品盗難 ダブルゼロ	いじめ重大事態1件	未達																	
<p>②SSHⅢ期期中間評価前年度に当たり、「Agents of Change」を育む指導を充実させるとともに、文理融合型の課題研究を推進する教育課程の開発を行う</p> <p>②感染症に留意して学校行事を実施する。海外の学校などと連携する行事を検討実施する。</p> <p>②ISSチャレンジを「アカデミック型」「ソーシャルアクション型」の新区分で行う。</p> <p>②生成AIの活用/制限について検討する。学問的誠実性の指導を徹底する。</p>	<p>【IB委員会】</p> <ul style="list-style-type: none"> 「AIなど進展する外部環境を踏まえ学問的誠実性を見直すとともに体系的指導を行い研究倫理への理解を深める。剽窃チェックソフト「Turnitin」の活用を図るとともに、剽窃発見のための他の良い策についての情報共有を行う。」学問的誠実性ポリシーにAIの利活用について追記し、校内における体系的指導の基盤を作った。校内で話し合うことで、教員の関心や危機意識が向上した。生徒・保護者への説明会を各学年で実施し、ある程度統一した見解を構築した。 <p>【SSH委員会】</p> <ul style="list-style-type: none"> ISSチャレンジを統合して運営し、多様な研究活動を支援した。ISSチャレンジ発表会も外部協力者や卒業生も招いて実施する予定。 多様な専門分野の大学教員や卒業生からの支援も受け、文理融合型の課題研究を促進する取り組みとして研究相談会・研究計画書へのアドバイス・外部評価会・研究経過報告書へのフィードバック・論文添削・発表指導などを行った。 九州方面にて、生徒企画による人工芝についてのスタディツアーを実施した。 SS特別講座として、新たに物理分野の講座を実施した。また、NICTや国立天文台の協力を得て新たな講座を実施した。 同窓会と連携し、研究相談会・外部評価会・研究経過報告書フィードバック・ 																		

		<p>論文添削・発表指導などを行った。多様な専門分野の卒業生から協力を得ることができた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・長崎県立大村高校と連携し、軍艦島フィールドワーク（ネクストジェネレーションミーティング）を実施した。 ・東京学芸大学主催課題研究成果発表会に参加した。 		<p>進路指導と保護者との連携の充実をはかる</p>
<p>研究活動</p>	<p>⑬IB校に勤務する教員として社会的ニーズを踏まえた質の高い授業を展開し、積極的に授業評価を行う。採用1年目の教員が授業を計画的に参観する取組を行う。</p> <p>⑭試行導入する教務支援システムで学校のDX化を加速する。教科支援策としてAIの活用を検討する。ジャパンナレッジ、電子図書館のDX化を促進する。</p>	<p>【国際教養】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・各学年が「国際教養」の立案・実施に努めるとともに、今年度の実施記録を残して今後の体系化にむけて改善を図れるようにした。（目標①⑨） ・各ワークキャンプにおいて、その成果を「協働スキル」に着目してポスター発表を授業研究会において行った。 ・生成AIサービス「スタディポケット」を試行的に、全生徒・全教員に導入した。 <p>【研究部】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・Teamsを活用して、校内研究のDX化を促進した。生成AI（ChatGPT,Perplexity,Canva）を試行的に導入して活用方法を検討した。 ・校内研究会では研究グループでの協議に加えて、グループ間での協働を取り入れるなど他の領域への学習の転移に目を向ける活動も取り込み、研究紀要にも該当の章を追加した。 ・グループ間での取り組みを導入したことで、教科グループ単独では得られなかった新たな気付き・示唆が得られた。 ・年度当初と授業研前には小学校と中等の研究部代表でそれぞれの研究についての情報共有や協議を行い、概念的理解の形成やそこからの転移（一歩踏み出す/萌芽）など共通のテーマで研究を進められたことを確認した。 ・2年間のスパンでの本校の校内研究体制を踏まえて研究開発課題「深い学びに根ざした概念的理解の形成 ー協働的に学ぶ生徒の姿と転移の萌芽ー」を設定した。 <p>【主幹教諭】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・7月と2月に2回の生徒が回答する授業評価アンケートを実施した。 	<p>【研究部】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地区での附属研なども活用してさらに連携を強め、小学校と中等の両校研究部同士での情報共有や地区研修会での教員の協働をすすめることで、大泉地区としてIBの教育実践開発を発信できることが望ましい。 ・次期学習指導要領に示された『中核的な概念』とIBにおける『概念的理解』の共通点および相違点を整理し、IBの理念に基づく探究的・概念的学習が学習指導要領の枠組みの中でどのように位置づき、学校現場においてどのように具体化し得るかを検討する。 <p>【主幹教諭】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業評価アンケートは今後も実施する予定。それぞれの教員がアンケート結果を十分に活用できるような工夫を検討する。 	<p>生徒の進学先での活躍につながるISSチャレンジなどの取組の継続および充実をはかる</p> <p>生徒の実態に応じた素早い変革できるISSチャレンジの強みをいかし、持続的に発展させる。</p>

学生 の教 育・ 支 援 活 動	⑳授業参観や大学院研修・教職大学院 IB 研修や教職専門実習を積極的に受け入れる。	<ul style="list-style-type: none"> ・教育実習のための授業参観や指導案作成のための指導、事前指導、実習中には各教科で十分な指導を行った。 ・教職大学院IB研修では、各教科でMYP17・DP18の35名の教職大学院生を指導した。各教科で、授業参観6時間以上、講義を12時間以上実施した。 ・教職専門実習として、数学科、体育科、合計3名の大学院生の研修を担当した。各教科では授業参観および指導案作成のための指導、OJTとして授業・活動を実施した。 	<ul style="list-style-type: none"> ・今後も学部生、大学院生他の要望を把握し、授業参観に積極的に協力する。教職大学院や教職専門実習を受け入れ、各教科の特性を踏まえつつ丁寧に指導する。 	双方に恩恵がえられる体制を整える。
社 会 貢 献 活 動	⑳IB 校として、また現職教員研修の場として学校見学や研修のための学校訪問を積極的に受け入れ、必要な情報提供を行う。大学・政府自治体等公的機関から申し入れのあった授業研究を中心とした研修会を、校務に支障をきたさない範囲で実施協力する。	学校の都合に会う限りにおいて積極的に学校見学や訪問、授業参観を受け入れ、情報提供を行った。4月に新人教職員対象IB研修会を行い、19名が参加した。通年随時受け入れの外部対象IB研修会を実施した。第6回授業研究会（1/23）には全体178名が参加した。	<ul style="list-style-type: none"> ・今後も学校運営に支障がない限りできるだけ視察、訪問を受け入れる。本校の教育研究成果、IB教育の効果等の普及に努める。 	SA 活動など本校の強みを強化する。ボランティア以外の地域連携を検討する。

3. その他特記事項 特になし

4. 自己評価委員会委員、開催日

校長	雨宮 真一
副校長	後藤 貴裕
	山根 正博
主幹教諭・教務主任	深澤 祐美子
主幹教諭・生活指導部主事	長谷川 智大
主幹教諭・進路指導部主任	菅原 幹雄
総務部主任	河野 真也
研究部主任	森本 裕子

開催日：令和8(2026)年3月31日